

令和3年度 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会 委員事前意見

■福島民友新聞社 編集局長
小野広司 委員

3月28日(月)会議にリモート出席予定ですので、あらかじめ運営面や常設展示への意見を提出します。

全体として、語り部活動の充実や企画展などイベントも多彩になってきており、アーカイブ事業としては面白さを増したと思います。興味のある方に対してタイムリーに情報を提供して「福島を知ってもらう」という主目的を達成するには、スタッフの皆さんが自主的、意欲的に取り組む「企画」がより多彩になってこそと考えていますので、良い方向だと思います。新年度事業でも「専門研修プログラム」の拡充が非常に興味深く、また、オリジナル防災グッズなどはもっとアピールしてブランド化してはいかがでしょうか。

活動が充実してくる一方で、単発で訪れる方には常設展示が肝になりますので、ここでは常設展示を中心に意見を述べます。

【運営】

1. オープニング映像の間隔は15分で、インターバルとしては「十分すぎる時間」と感じます。次の上映までの待ち時間に「何をするか」「何ができるか」の提案をスタッフからいただきたい(券売機周りで「待ち」態勢の職員を御みかけします)。例えば、ロビー展へ誘うなど「明確な案内」があると、待たされた感覚が薄らぎます。トイレは館内の構造上、決して近い場所ではないので、上手に誘導するのも大切でしょう。最初に「おもてなし」の姿勢をみせることは大変重要です。

2. 館内随所にスタンバイしている学芸員、スタッフは「案内人」であるだけでなく「ふくしまの顔」です。しかし、何か戸惑いを感じているように映ります。自信をもって対応してください。また、来館者には「近づいて説明してほしい」と思う方、「静かに見て回りたいから近寄らないで」という方など様々ですが、見極め術を磨き、一方的でない対話型の説明や、ここぞという「紹介」をうまく使い分けられるよう頑張ってください。

3. 原子力にまつわる展示に関しては、見る人が多種多様な反応を示します。アンケート意見を拝読しても、立ち位置によって鑑賞後の感想が極端に違います。「偏りのない説明」は難しいけれども、館内職員が「どっちつかずで あやふやな説明」をすると攻撃されやすいので、「専門の研究者でない」場合にはその旨をはっきりと意思表示し、より詳しく語れる方を紹介してください。▼復興にまつわる展示に関しても、政治的に多種多様な考え方の人が来館するので「あやふやな説明」は不信感を抱かせます。例えば赤羽さんのビデオを見て納得する人もいれば、批判的な見解を持つ人も少なくないでしょう、これは見る人の「立ち

位置」が影響するので当然ですが、迎える側は「光と影」の双方をしっかりと説明してください。来館者の理解が深まると思います。

【展示】

1. 回転スロープの年表は2020年以降の歴史をどう刻んでいくのでしょうか？伝承すべき大きな山はこれからも多々ありますので、方針があればご教示ください。

2. 後発の「とみおかアーカイブ」の評価が高いのは、1周して飲み込める情報量に収まっているコンパクトさと、個々の展示に「物語」が付されていることでしょうか。伝承館には、展示物がどんな意味を持つのか、来館者に「語り掛ける」ものが、まだ足りないと思います。「考えるきっかけ」を提供する添え書きの充実を希望しますが、スタッフが口頭で添える「物語」がもっと増えれば、展示が生きてくるし、見る方の印象もグッと強まると思います。

3. 壁面のモノクロ写真群は、何を捉えたものか、意味しているものは何かが見る人に伝わっていないでしょう。一部を提供した新聞社としては「もったいない」と感じてしまいます。

4. 長いスパンでみるべき廃炉の影響や、トリチウムを含むアルプス処理水をめぐる問題、今後予想されるデブリ取り出し後の保管の問題、大量の放射性廃棄物の保管・搬出問題、中間貯蔵施設の県外搬出の課題、帰還困難区域全域の除染の問題などを、どう展示して社会に問いかけるかが問われていきます。初期の10年間についての伝承だけで満腹になっている館内状況を見ると、「原子力災害」伝承施設として今後生じる課題や地元の復興の取り組みに関する記録・伝承は「別館」を設けるか、「メタ」空間に保存展示していくような大胆な発想の切り替えが必要になると考えます。

5. アンケート回答から気付いた点として、「原子力災害」伝承施設は被災3県の中でも福島だけであり、東北の避難者や沿岸部水産業者ら少なからず原発事故の影響を被った方々の記録伝承を担う必要があると考えます。

6. 常設展示を見終わった後の「後味」は施設の評価を形作る重要な要素だと思います。常設展示の「締め」がぼやけた印象の現在、2階出口を出た後の写真展や屋上からの展望、1階フロア展示などが重要になりますが、それぞれの連携性、案内などに、もっと磨きをかけてみませんか。そこに「魅力的な展示」や「考えるヒント」があると、再訪したいという気持ちを抱かせます。

■ 広野町起業型地域おこし協力隊

大場美奈 委員

今回の展示の見直しや企画展、令和3年度の取り組みを実際に来館し見学した際の意見も踏まえてまとめてみました。感じたことはたくさんあるのですが今回は「震災をいかに自分ごとにとらえてもらうか」について若い世代が見た時の意見を書かせていただきます。

● 震災をいかに自分ごととして考えさせられるか。

団体客が多い。また、学校機関が多いため、震災を知らない世代へ災害をよりリアルにわかりやすく伝えていく必要がある。その為にはいかに震災を自分事にとらえてもらうか伝えたかが重要だと考える。

① 記入型のパンフレットなどの作成

館内を見てまわるだけではインパクトは伝えられてもすぐに忘れてしまう。その為、展示品からクイズ形式などで問を出し、記入しながら館内を進んでもらう。答えは最後に配るでも良い。しかし、答えを探すことに意識がいかないようにあえて答えのない問を出すのもありだと思う。(心情や被災した方の想いなど)東日本大震災はまだ終わっていない、現在進行形の震災なのだという事を伝える機会につながる。

② 語り部の意識の統一

館内の語り部から貴重な体験談や原子力について生の声を聴けるのはとても良いこと。しかし、聞いて終わりになっているのがもったいないと思った。語り部の伝えるという部分に考えてもらうという要素をプラスできれば良いと思った。

また、来館者のニーズをくみ取りながらそれに合わせた自分の体験談などを話せると良いと感じた。私自身、館内を来館者として訪れた際に語り部の方が、一方的に話してその場所に10分ぐらいとどまってしまう自分のペースで見たいのにと少しもやもやしました。

③ 展示の割合について

原子力災害について伝えていくのも大切ですがもう少し、震災について増やしても良いと思った。震災を知らない世代からすると原子力についてはネットや本などで勉強できる。しかし、災害・震災の部分は展示からしか伝えることができないのでそこをもう少し厚みを持たせても良いと思う。